

栗田稔生 島末智成

はじめに

今年度は、表現愛を育む国語科学習の授業と評価が、より具体的になっていくために、以下の課題を持ち、研究を進めてきた。

- ・単元の学習を深く分析し、どのような姿を満足できるとするのかを、育ちの違いも考慮しながら検討していく。
- ・より満足できる子どもたちの姿に近づくための授業を具体的に提案していく。

そこで、研究のまとめとして、これらの課題について振り返ってみる。

成果と課題

- (1) 単元の学習を深く分析し、どのような姿を満足できるとするのかを、育ちの違いも考慮しながら検討していく。

この課題については、育てたい態度や能力を明確にしていくことで、満足できる具体的な姿をより細かく想定していこうと考えた。

そのために作成していったのが、「評価規準付き年間指導計画」と「学びのきまり」である。

評価規準付き年間指導計画

この年間指導計画を作る際には、表現愛を發揮している子どもたちの姿を考えることから始めた。

例えば「作文を書くことの表現愛を發揮している子どもたちの姿」を考えると、まず、低学年では、「句読点やかぎかっこ、助詞を使える。」ということになり、中学年では、「句読点の使い方がほぼできる。」高学年では、「段落分けがほぼできる。」ということになる。

このような姿こそ書く活動のなかで、作文を書くことの育てたい態度や能力ということである。このような姿を「話すこと・聞くこと」「読

むこと」「書くこと」に関して細かく想定していくことで年間指導計画を作成していった。

今年度は、満足できる具体的な姿を意識しながら、年間指導計画を具体化していくことができたことについては、一定の成果を挙げることができた。

学びのきまり

また、本年度は、国語科として提案できる「学びのきまり」を充実させていくことにも取り組んだ。

このころの子どもには、羅列して長々と書いたり、起こったことなどをとにかく全て書こうとしたりする姿が見受けられます。

(中略)

支援としては、「はじめに」「次に」「そのあと」などの順序を表す言葉(表現の工夫)を拾い上げる。「最後はどうなったのかな」と最後までしっかり書くことに気をつけよう言葉がけ、また、「ケーキを食べているときには、どんなお話をしたのかな」と会話文に着目する言葉がけをするのもいいでしょう。

とにかく、教師が共感していくことを心がけましょう。

図2-1 低学年「書くことの学びのきまり」

学びのきまりのなかには、育てたい態度や能力について、具体例を挙げながら、載せるようにした。また、どのように評価していったらいいのかを、より具体的に載せるようにした。この学びのきまりを、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』活動全てに、対応して充実させていくことができれば、ひとりひとりの子どもに対する適切な支援や働きかけが明確になる。

「年間指導計画」や「学びのきまり」については、まだまだ改善を要するものであり、今後も作成し続ける必要がある。また、今後は、国語科だけで

はなく、学年で実際に使ってみて、どうだったのかという話し合いを深めていったり、使っている学年からフィードバックをしてもらったりしながら、より深く検討していかなければ、完成しないと考えている。

しかし、「年間指導計画」と「学びのきまり」が、ある程度作成できたことは、国語科として考えている表現愛を育む国語科学習の授業と評価を具体化していく中で評価システムの構築に成果があったと考えている。

(2) より満足できる子どもたちに近づくための授業を具体的に提案していく。

次に、その年間指導計画や「学びのきまり」を生かした具体的な授業の流れを考えていった。年間指導計画や「学びのきまり」は、学年毎の育ちの違いに配慮した満足できる具体的な姿と評価について想定してある。以下のような評価をしていく授業を展開していくことが、国語科が考える「評価を生かした授業」の具体的な姿であり、表現愛を発揮する子どもを育てることになる。

- ・単元における中心となる評価観点の設定
- ・全授業時間における評価規準の作成
- ・各時間での評価、それに基づいた支援
- ・評価に基づいた学習形態の工夫
- ・単元終了時の評価
- ・次の単元に生かす評価

言葉を使った活動の中から、この単元で育てたい態度や能力の中心を設定し、『話す』『聞く』『書く』『読む』活動のなかから中心となる活動を評価することを決める。次に全時間の授業のなかで、子どもたちのどの活動をどのように評価していくのかを考える。それぞれの授業時間では、評価規準をもとに、満足できる具体的な姿に近づけるような支援を繰り返す。その支援の中では、子どもたちの学習を評価し、グループ作りや交流に生かすような学習形態の工夫も行う。単元が終了した時には、単元終了時の評価を行う。この評価は、次の単元に生かす。このような学習の流れが、「評

価を生かした授業」の具体的な姿になると考えた。

このような「評価を生かした授業」の具体的な姿を提案できたことは、国語科の学習の流れを共有しながら進めていくことに関して、ある程度の成果を得たと感じている。

例えば、公開授業 1年生「サラダでげんき」の実践では、「各時間での評価、それに基づいた支援」に関わって、評価を音読中心とすることで、繰り返し音読の姿を評価していった結果、子どもたちの音読の姿が成長していったこと。また、「書くこと」を評価する際に、前時の評価をもとにして、子どもたちに支援を行うと、本時のワークシートの記述が変化したこと。これらの手応えを感じることができた。

また、公開授業 「ディベートをしよう」では、「評価に基づいた学習形態の工夫」に関わって、ディベートのグループ編成を少人数にすることにより、指導者の評価が的確になった。また、子どもたちの話す活動、聞く活動が増えた。その結果として高学年の満足できる具体的な姿である、友だちと友だちの話のよさを組み合わせ、新しい考えを生み出していくという姿に近づいていったという手応えを感じることができた。

おわりに

以上のような授業と評価を今後もより具体的にしていくことによって、「今ある自分そのものを、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』活動を通して、他者と関わり、さらに自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこうとする」とともに、人間関係をも豊かにしていこうとする」子、つまり表現愛を発揮している子が育まれることになると考えている。

今後は、想定しきれなかった1時間の学習に応じて満足できる具体的な姿を想定していく作業を続けていくことや、より具体的な評価のあり方の中でも、「単元終了時の評価」や「あゆみの評価」をより具体的にしていくことについて、もっと研究を深めていく必要がある。

